龜井勝一郎全集

第二十一巻

講談社

亀井勝一郎全集　第二十一巻

昭和四十九年七月二十日　第一刷発行

著者　亀井勝一郎
発行者　野間省一
発行所　東京都文京区音羽二―一二―二一
株式会社　講談社
郵便番号　一一二
電話　東京〇三(945)一一一一(大代表)
振替　東京三九三〇
印刷所　豊国印刷株式会社
製本所　大製株式会社

落丁本・乱丁本は
お取り替えいたします。
©亀井斐子　昭和四十九年

Printed in Japan　定価は箱に表示してあります。(文1)

龜井勝一郎全集　第二十一巻

編纂

河上徹太郎

中村光夫

丹羽文雄

山本健吉

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

第二十一卷　目次

日記

昭和二十年……九
昭和二十一年……五〇
昭和二十二年……九七
昭和二十三年……一〇五
昭和二十四年……一二七
昭和二十五年……一三四
昭和二十六年……一五六
昭和二十七年……一九一
昭和二十八年……二一〇
昭和二十九年……二二一
昭和三十年……二二〇
昭和三十一年……二三二
昭和三十二年……二六一
昭和三十三年……二二九
昭和三十四年……二五一
昭和三十五年……二五二

書簡

書簡……三五五
書簡索引……五五七
解題……五六四

日記（昭和二十年——三十五年）

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

昭和二十年

紀元二千六百五年（昭和二十年）一月二日

新春を寿ぐ、子供達みな元気なるは幸ひなり。今年のことを神仏に祈る。いま国家の障りとなつてゐるもの二つあり。一は財閥、一は官僚、ともに天皇親政をさへぎり奉るもののみなり。国内の戦争に対する心の準備を堅めおく要あり、戦争は対外的のみならず対内的の戦争あるを忘るるべからず。

一、荒唐無稽とは何ぞや、今の我々にとつてさうみえるものも、それをかいた人にとつては必死の祈りであつたかもしれぬ。何がかくあらしめたのか、その信心をみるのが実証的であらうに。歴史とはみなこれ神話かもしれぬ。我の体験から語る、時代苦——危機感を根本とせる祈念が古を呼びよせる、或は古の方から到来する、この祈念と感応の一致するところに歴史は成立する。それは継ぐ行為であつて、決して客観的に冷視することではない。人間の非情は果して真に非情なりや否や、久米邦武の論もまた一の伝説なり。明治の進化論と合理主義による知性の叙事詩なり。資料の適確と実証性——それは武士的な頑固さに貫れたものであるが、しかし心にそぐはぬものあり。

二、歴史と想像力の問題、類推の危さと悦びと。

一月五日

馬子の妻のこと（物部あらか火の妻のこと）

女性が国家のことに口を出すことはいつの時代から始つたか。その利害の大なること。極めて打算的であり、家庭内の些末事を国家の大事のごとく云ひ、国家の大事を家庭の些事のごとく判断す、之によつて夫を迷はすものなり。馬子の物部討伐の根本に彼の妻の発言の大なりしことを思ふべきである。財産相続における不満もありしならん。当時の大なる流言であり、おそらく事実に近いであらう。公の歴史に記載さるるほどであるから記載されざる部分で相当の辣腕をふるひしならん。後世の橘三千代、北条政子、あるひは現代にもその例少しとせず。《109》

一月六日

文明の謳歌と文明の悲哀、――この無限の差異をよくみる事

一、聖徳太子を文明の開顕者といふのみにては不可なり。文明の謳歌者に非ず、文明の悲哀をよくみつめた方として尊し。文明とは何か？　甚深の祈念は何故文明とともに深まるか、文明は果して浄土の因なりや。「幸福」をもたらしたかどうか、事実をよくみた上ではじめて仏道が問題になる。蘇我にあつては仏法はまさに文明であつた。太子にあつては仏法は文明への懐疑であり失望であつた。御遺言と三経義疏をみるとき明らかである。それを文明と考へるところから仏法は知識と化し様々の文化論が出る。文明のもたらした混乱の凝視、そのために傷いた姿をよくみて、然る上に十七条憲法は成立した。

二、歴史と信仰、歴史と知性、知性と信仰の格闘の場としての歴史（理智と信仰）。

いかなる伝説をも信ぜず、あくまで歴史的事実を鮮明ならしめんとの欲求、ところで歴史的事実――万人が承認するところの資料とは一つの金銅像と布片にすぎない。文献としては十七条憲法と三経義疏、それをものされた背景や御心はどこまでも一の謎として横はつてゐる。再び現出せぬ永久の過去の裡に眠つてゐる。この眠れるものを我らは何によつてよびさますか。あらゆる資料から今日の自分の「理智」にあてはめて納得するもののみを真とするならば、その不安定においては伝説といさゝかも異らぬ。「理智」を満足させる――自己満足の虚妄――信仰――敬愛と謝念と継ぐ――歴史とは継ぐ行為である。何によつて継ぐか――現在の己の祈念によつて。祈念とは危機感に発した未来への憧憬である。未来（浄土）を念頭においた危機の意識――危機感は必ずそれよりの脱却の意志をもつ。この意志が祈りとなる。これを通して眠れる霊をよび起す以外にない。即ち無限の可能性と示唆への無限の《111》接近――想像力の完全な遂行と云つてもいい。しかし想像力はやはり理智と相談して、そこに一の限界を、即ち納得出来る範囲をつくりやすい。この範囲とは云ふまでもなく「我」であり、「我」を中心に類推した同時代の誰某の顔であり党派の旗色如何にかゝはる。一の歴史的人物が、ある時代には高く評価され、ある時代には敵視される、又党派によつてはつきり二つに別れる、かうした不安定から脱する道はないのか。公平といふ概念の曖昧と無味乾燥なること。尊敬も憎悪も冷却して、遂には史料そのものだけが石のごとく露出するであらう、それは法隆寺の本尊を鉱物学の対象にするやうなものだ。しかし我々は拝む――拝むといふことは絶対的である。たとひ偏してゐようと、否さやうな顧慮なくそこに捨身して悔いずといふ一の絶対に達せんとする

念願――こゝでは一つの問ひと一つの答あり、それは真に実在的であるのかないのか、太子は果して太子であつたのかないのか。こゝに身をすてて悔いず。（親鸞の答）

これがこのまゝ歴史に対する最終の態度となるであらう。この不安定の中に胚胎した決断こそ恐るべきである。太子伝暦といふ不完全極まる一の創作から鎌倉の信仰が深められたのである。何万の人間が信じたのだ。そして完全とみえる現代の太子論をよみつゝ、人間はこれを信じないのだ。伝暦の虚妄からまことの真信が生れ、現代太子論の正確からたゞ不信がたゞよつてゐる。これが文明の正体である。

最も信じるに足るものありとすれば、太子薨去後、太子を慕ひ奉つた妃や側近の人々の思ひ出であるに相違ない。橘郎女と巨勢大夫の歌として残つてゐるもの是也。太子の歴史はこゝに始る。この敬慕の情が語りつがれたそのときの音声は言葉より更に確実であると思はれる。文字として表現されつくされぬ万感の思ひ――《113》親鸞の和讃。こゝで日本書紀の論ひについて語ること、本居宣長の純粋を求めた精神、歴史――文字によつて支へられた歴史でなく、言声――言霊によつて支へられた歴史を。こゝにその真を求めたのである。――祈念のもつ想像力がその大きい力を発揮するのはこの場だ。文字をとほしてさへなほ之を得んとする。この無限の可能性へ挑む興味がなかつたなら、歴史はたゞ一度かかれれば事足りる。同一の人物について幾千冊の伝記があらはれ、しかも未来になほさうであるのは何故か。歴史の驚くべき深さと、時代の永久に変らぬ危機感の照応によるのであらう。

私の歴史観の変遷

一、学校教育――最も形式的で無味、資料と浅薄な教訓癖。

二、唯物史観――日本史を一つも知らずしかも方法論のみ極めて旺んな時代。

三、古寺の巡礼――不幸な迷へる旅人、素朴に感嘆せり、一木一草、本。

四、戦乱と未来――国民の胸底に宿つた祈念の音声、死についての思索。

五、固有の祈念――謝念の像を残しておきたい。

一月十七日

「親鸞」再読して思ふ――教行信証のよみ方極めて不充分、不勉強なり。

一、大谷光瑞の「見真大師」面白し、越後より関東へ移住せるときはすでにこゝで生を終るつもりであつたらしい。人生五十年として五十となればすでに晩年を意識す。教行信証

は晩年の最後の著作としてかかれたもので、死期を念頭においた云はば最後の思ひといふつもりで出来たもの也。この点とくに留意すべし。

二、思ひやりの深い凡夫とは即ち菩薩なり、菩薩と凡夫との直通として親鸞をみる必要あり。親鸞といふ人は結局凡夫菩薩であつた。菩薩道即ち凡夫道である。《115》

一、太子と馬子との関係、政治的関係あるひは血縁のみをみて、宗教的関係をみるもの殆んどなし。しかもこの点こそ最も重大なり。馬子といふ魔性のものとの一生涯にわたる対決なくして太子の信仰はありえなかつたであらう。馬子を脚下にふまへ、しかも馬子の不信の信と対決せり。馬子はこれ永遠に救はれざるものであり、しかも永遠に救はれざるものこそ宗教上の第一義の問題ではないか。甚だ悪しきものすくなしと言ふ、馬子はそのすくなきものの随一なり。

二つの世相

人間の自然の感情をそのまゝ尊ぶことを知らねばならぬ。これを人工的に粉飾することは却てこれを殺す結果になる。伊勢大神宮爆撃に対し国民は思はず息を呑んで畏れ謹んだであらう。無言の怒り——真の怒りは却て深い沈黙に宿る。然るに諸新聞はこれを「宣伝」の具とし、名士などをして教説せしめ殊更に自然の怒りを人工化して硬化してしまふ。是「宣伝」の罪悪なり。すべてについてこの例多し。

郵便局の窓口にて喧嘩す。不親切は今に始つたことではない。行政の末端においてこの例枚挙にいとまなし。疲労や混雑もあらうが、一般国民に対する思ひやりといふものは当今絶無なり。官業と官吏と之現在の病なり。国営は理想なれど、之を運用する人間は忽ち俗吏となる。厖大な組織にかくれた責任の回避、厖大な組織のもつ魔術性について考へること。個々の官吏は人間としてとくに非難すべきことなし、家庭人として個人として国民と異るところなし。たゞ一たび役所の門をくゞり、一の場所に着くや否や別人となる。官吏とは二重人格なり。この官吏の下に傭人あり女事務員あり、すべてこの気風をうけつぎ、国民の口をとざす。国民は官に対して泣き寝入りの他なきもののごとし。「一切の希望を捨てよ」《117》

一、歴史感覚、古人に対し、かくもありえたらうかといふ仮定、想像が、かくありえたといふ断定になる——創作——歴史の創作性を無視出来ず、問題はこの仮定や想像が果して適確なりや。つまりこのときの適確とは敬愛の純一性である。あらゆる伝記について之を明察せよ。捨てるものと採る

ものとあり、歴史の客観的評価などありえずと知るべし。太子伝暦のもつ生命について。何故これが信仰の母胎となつたのか。しかも明治以後の資料の正確が何故信仰を浅くしたか。これ重大問題なり。

一月二十日

「親鸞」補遺

一、凡夫の自覚――思ひやりの深さ、即ち菩薩、菩薩と凡夫の直通の道。

二、晩年の意識に由る制作――教行信証。

三、念仏まうさんと思ひ立つこゝろ――そのこゝろの直視――念仏の原始性を深めよ。

四、三願転入の理――論理としてでなく身証開顕として、三願のうちとくに十八願とせるは、そこに端的な「一念」のみあり。即ち無条件の念仏、――与へる方では無条件であり、之を聞信せる方では無償性をもつこと。

五、自意識に基く苦行の観念性。自力修業とは自意識なり、之を破砕すること。対立感の除去、聖道門を悪し他力門を善しとすればこれ分別なり。聖道門を悪しと断ずるに非ず、「いづれの行も及びがたき身」といふ表現に注意せよ。その不定と観念性に対する嘆きとして考へること。自力より他力へ――この転入に論理性なし、是非分別なし、むしろ放下の状態といふべし。救はれると断ずるも不可、救はれずと断ずるも不可。総じて是非分別すべからず、たゞ念々に念ずるのみ。一念のみ――一念とは地獄に堕ちても後悔せずといふことなり。

六、思ひやりの深さ――これのみが真の実行なり。実行力――菩薩の道なり。〈119〉

七、大乗といへば人みな大乗へ行く、他力といへば人みな他力へ行く。自力とは自己分別なり、本来ありうべからざるもの也。化他とは化他の意識に非ず、自意識の反対として他意識もつもの菩薩に非ず。他意識あるかぎり分別あり。救つてやらうと思ふその意識が救ひを不純なものにする、この意識が宗教上の臭味となるのである。之を往相について云へば、どのやうな名僧も救ふなど出来なかつたといふべきであらう。救ふことの不可における悲嘆告白――そのものが之を聞くものにとつては救ひとなつたのだ。「小慈小悲もなき身にて、他人利益は思ふまじ」――こゝに思ひやりの深さが涌出する。

八、無智文盲への捨身――これ「民衆の中へ」に非ず、社会主義的に非ず、大乗の願也、故に永久也。

聖徳太子の信仰

一、経文に対する態度。「如是我聞」の註疏、仏音を聞く。一音の意。

経文そのものの構成に関する見解。

二、善の意義、善の義は本帰依に在り、帰依を根本とするゆゑに、そこに自他の分別なし。儒教的の人為道徳なし。道徳としての善に非ず帰依としての善なり。こゝに小乗の分別する善との根本相異あり。万善同帰——、善に千種万別あり。南無といふもこれ善——帰依あるかぎり之をよしとす。信の根本は善なり、善の根本は帰依なり。

三、帰依の対象は無常に対して常住なるもの——即ち如来である。この如来の本体とは何か、生死の帰依するところ、生死を超えた永遠の生であらねばならぬ。

四、万善同帰——一切衆生の願を根本とす、その願自身如来の促しなることを。

五、仏国土の問題

六、菩薩の疾

七、天寿国の問題《121》

太子の馬子に対する態度と馬子の信仰

（一、永遠に救はれざるもの）

。勢力と道力（勝鬘経）より

。罪——過去の罪（維摩経）より

政治的軍事的顧慮以外に宗教上の態度を最も重視する必要あり。

馬子の信心——自己分別か？　懺悔ありや、永遠に救はれざるもの——絶望心ありや否や。

一月二十七日

弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて（往生をばとぐるなりと信じて、念仏まうさんと思ひたつ心の起るとき、即ち摂取不捨の利益にあづからしめたまふなり）

「信」「心」「利益」——この三つを同一刹那としてみること肝要と知るべし。

たすけまいらせてといふ言葉あるゆゑに然り。思ひ立つ心——こゝに一切衆生を含む意あり。「念仏まうすとき」といへば念仏まうす限られた人となる、親鸞においてはこの限界を破砕せること肝要なり。

同時にこの自由性が危険となる——修道の放棄と我慢をもたらすこと必須なり。

一月二十九日

作品が作家の原因となる。作品が作家の怨霊となる。何か

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com